

永遠と現在

親鸞の語録から

吉本 隆明
yoshimoto takao

唯円ゆいえんが書きとめた親鸞の語録とも言うべき『歎異抄』には、「永遠」に朽ちない言葉や永遠についての問答とも言うべきものが残されている。

そして、この「永遠」の意味は永遠についての言葉でもないし、永遠とは何なのかについての言葉でもない。ごく普通の日常にありふれた言葉なのだ。だがたぶん、永遠に保存せずにはおられないと人々に感じさせる言葉だと思える。

親鸞ハ、父母ノ孝養ノタメトテ、一返ニテモ念佛マフシタルコトイマダサフラハズ。ソノユヘハ、一切ノ有情ハミナモテ世々生々ノ父母兄弟ナリ、イヅレモノ、コノ順次生ニ仏ニナリテタスケサフラウベキナリ。ワガチカラニテハゲム善ニテモサフラハダコソ、念佛ヲ廻向シテ父母ヲモタスケサフ



ラハメ。タゞ自力ヲステゝ、イソギサトリヲヒラキナバ、六道四生ノアヒダ、イヅレノ業苦ニシヅメリトモ、神通方便ヲモテ、マヅ有縁ヲ度スベキナリ。(『歎異抄』)

たくさんのが詰め込まれている。また、なかなかに珍しい問題提起で、その上、珍しい根拠づけだと思える。

じぶんは父母の孝養のために念佛したことはないというは、『新約聖書』の主人公イエスもほぼおなじ趣旨のことを「わが父とは誰ぞ、わが母とは誰ぞ」というような言い方で述べている。イエスの根拠は、信仰を同じくする者はみな父母兄弟だという信仰の同一性を要めとする考え方と、身近な人たちと日常の言葉で日常の親和性を通じさせることができても、神の言葉は、血縁などない人々よりもかえつて通じさせることができ難い存在だという認識を語っている。

こういう心理的な洞察を歴史の創生期に持ち得ているのは、西欧思想の特質だと言えよう。『歎異抄』のなかに親鸞の言葉とされるこれと類似の洞察は、一つには、新約の主人公と同じ優れた宗教者に特有な肉身の有縁性を超えるという洞察から来ていると思える。だが、親鸞の言葉にあるもう一つの根拠は、まるで違う宗教理念の背景に依っている。父母と子である自分や兄弟とのあいだには、ただ一世代の差として考へるかぎり、自分たち

子の側には半分の生の責任(業縁)しかない。

〔ごうえん〕

自分たち子の世代には、この世に生まれたいという希望も意志もなかつたし、父母への要請によつて生まれたのでもない。父母もまた、祖父母に対して自分たちと同じ思いを抱いたに違ひない。父母と子である自分たち兄弟姉妹の関係を無限にさかのばれば、子の世代がこの世に生まれようと願望してもしなくても、産んだ父母の世代の無限連鎖でないものと考え、単に親子のあいだ一代をとれば、子は生まれてきたことに自分の意志はなく、

高々半分の責任の倫理を負うに過ぎなくとも、最終的には、この世に生まれ出たことの存在性の倫理を全面的に引き受けることになるだろう。それと共に「一切ノ有情ハミナモテ世々生々ノ父母兄弟」という親鸞の考え方も、仏教の考え方も成り立つことになる。

この考え方は、明らかに『新約聖書』の主人公の考え方と異なつてゐる。『新約聖書』

は、現に目の前にいる父母兄弟は家族の肉身だが、神の信仰とは次元を異にする。もし、父母兄弟を主人公の信仰の次元と同致させたいのなら、父母兄弟のあいだの特有な親和や肉身の倫理を、神の創造したものの系列の内側に取り入れてこなければならない。それによつて肉身であるための親和や倫理は捨てられ、神の創りなせるものの倫理に組み替えなければならぬはずだ。神と信仰を同じくす

るものだけが父母兄弟だという以外に、父母兄弟の概念は、存在し得ないこととなる。これが福音書の主人公が言う「わが父母とは誰ぞ、わが兄弟とは誰ぞ」という意味に当つている。たぶんこの肉身との関係や親和の問題と信仰のかかわり方に言及した宗教者は、新約書の主人公と親鸞だけであり、また、ほぼ同じ扱い方の結論に到達しているのも、両者だけと言つてもいいかもしれないが、その理路は遙かに異なつてゐると思える。

新約書では、「永遠」は神の属性なのだが、親鸞では、父母と子の世代的な歴史の連鎖が無限にさかのぼることと見なしうるものとして、「永遠」が考へられるという意味になる。親鸞では、父母と子の世代的な歴史の連鎖が命ヲカヘリミズシテタヅネキタラシメタマフ御コ、ロザン、ヒトヘニ往生極樂ノミチヲトヒキカンガタメナリ。

シカルニ、念佛ヨリホカニ往生ノミチヲモ存知シ、マタ法文等ヲモシリタルラント、コ、ロニク、オボシメシテオハシマシテハシベランハ、オホキナルアヤマリナリ。モシシカラバ、南都北嶺ニモユ、シキ学生タチ、オホク座セラレテサフラウナレバ、カノヒトニモアヒタテマツリテ、往生ノ要ヨクノキカルベキナリ。

親鸞ニオキテハ、タゞ念佛シテ弥陀ニタスケラレマヒラスベシト、ヨキヒトノオホ

セヲカフリテ信ズルホカニ、別ノ子細ナキナリ。

念仏ハマコトニ淨土ニムマル、タネニテヤハンベルラン。惣ジテモテ存知セザルナリ。(『歎異抄』)

衆生は、誰もが父母兄弟の世に続いてゆく連鎖の鎖の一つとして「永遠」に関わり、またそれが「永遠」を作り出すものということができる。父母は念仏者になることで仏になり、子は続いて父母になり、子を産み、その連鎖が「永遠」をつくる。

この理念は仏教者の特性というよりも、親鸞の特異性のようにも思えてくる。「永遠」は、歴史概念というよりも父母兄弟が作り出す肉身の連鎖のことであり、しかもこの肉身の親和が連鎖を作るとき、この肉身は衆生の全てを覆うものに変性される。親鸞の信仰によれば、これが念仏者の本質なのだ。

わたしたち不信の徒は父母兄弟であります、が、父母として仏になることもできないし、兄弟として衆生の全てを覆う存在にもなれない。しかし、親鸞によれば個々の衆生の一人だとみれば、最も重要な存在なのだ。

ゆるぎない信仰者であつた親鸞は、言葉にうらおもてなどなく、真正面から思いのままを語り、唯円が文章として整えたというだけだつたかも知れない。だが、不信の徒であるわたしなどが、現在、千年近く後にはこの個所を読むと、親鸞が怒氣を含んで述べた言葉の要点のように受け取れる。常陸、下総、下野のあたりから、親鸞のいる京都まで、當時では想像もできないほど大変な道程だつたにちがいない。

お前らは何て馬鹿な奴だ。お寺もいらない、仏像もいらない、修行もいらない、ただ念仏だけ称えればいいとあれほど教えたではないか。知識が欲しいのなら経文を読みばいい。

また南都・北嶺には学問知識が唯一の誇りである学僧・高僧がたくさんいるからそこへ行つて教えてもらえばいい。そんなことなら、おれは彼等の何倍も勉学につとめた末に知識とか修行とかにそれほど価値がないと知つて、山を下りて法然の説くところに従つた。

親鸞の言葉の裏側にあるものは、わたしたちのようないいの徒からみれば、もう一つあるように思える。宗教や天職の修業は、じぶんの修業とはまったく関わりがない場所からやつてきた「現在」の情況の激動から、根底的に転倒させられることがある。そのときは、何はどうもあれ情況の方がじぶんの修業より重たいと感じられているのだ。

もちろん親鸞には、それはよくわかっています。親鸞の怒氣は、ある意味では、弟子たちに自分の姿を見たからだと思える。親鸞と訪れた弟子たちは、往路と還路ほどちがつて、しかも同じことに当面していた。そしてこの同じことというのは、往路と還路ほどぶつかり合う路であるにもかかわらず、念仏者として同行すべき路だった。なぜそんなことになるのか。それは、知識・修行・戒律よりも、「現在」の情況に当面しているかぎり現在の方

ゆとりをもてなかつたかの違いではない。また「祖仏共ニ殺ス」という徹底した修行の理念を持ち得たかどうかの問題でもない。僧侶自身の精神のなかに、歴史と現在、永遠と現象の二重性が融合し、同一化できていたかの問題だと言える。この融合がなければ、「祖仏」は共に死滅するほかないからだ。

念仏だけが淨土へ至る道だという考え方では、往路からも還路からも理解し、易行道と見ることができる。だが往路から見れば、易行が成就したらそのあとは難行に向かうという考えがつきまとう。現に『惠信尼書簡』は、親鸞自身でさえその迷いを捨てきれない場面があつたことを伝えている。それならば、弟子たちが法文を学ぼうと考えたり、親鸞の折り返して還路に至つた過程を、親鸞自身の口から聴聞したいと考えて、はるばる京都まで訪れてきたのは当然ではないか。

もちろん親鸞には、それはよくわかっています。親鸞の怒氣は、ある意味では、弟子たちに自分の姿を見たからだと思える。親鸞と訪れた弟子たちは、往路と還路ほどちがつて、しかも同じことに当面していた。そしてこの同じことというのは、往路と還路ほどぶつかり合う路であるにもかかわらず、念仏者として同行すべき路だった。なぜそんなことになるのか。それは、知識・修行・戒律よりも、「現在」の情況に当面しているかぎり現在の方

が重たいことを悟つてゐるかいなかの相違だということだけであつた。人間の意志とか判断とかも、自他を殺すこと、「祖仏共ニ殺ス」こともできるものだ。それは、佛教者であるかぎり誰でも心得てゐる。けれど社会的な情況が、人間の知識や修行を殺すことがあり得る。ということは、現実の情況にかかわりない知識や修行を主意として、自分が往路でやつてきた修行や知識の蓄積は、『教行信証』のなかに取り集めて、すべて捨てる。その上で、「地獄は一定」わが住家だと納得できたら、自分もまた往路の弟子たちと同一化できることは、忘れないと思うことを忘れるはずだ。人間は忘れないと思うことを忘れることができる。還路にあつて、往路と同一化することができるとすれば、易行道と最後の難行道を同一化することもできるはずだ。

地獄に落ちても悔いはない。この親鸞の考え方は、十余国の山河を越えて訪れてきた弟子たちはわかりにくかつた。彼等は往路の途次に淨土門に出遇つた念佛者にほかならなかつたから、知識的な理解も加われば加わるほど、念佛の理念を助けるものだつたからだ。また修行もいらないし、経文も読む必要がないとすれば、余力として残つてゐる上向する心は、何に向かえばいいのか。上に向かうことも下に落ちることもできないとすれば、どこへ向けて歩むのか。近いけれど遠い路を探すよりほかない。近いけれど還路とは、「永

遠」に対する「現在」という象徴にはかならないと言える。親鸞の、「永遠」に至る路を語る言葉の裏に怒氣が含まれていると思える。言い換えれば、京都まで親鸞を訪れてきた

弟子たちの言葉と行動のなかには、「永遠」と「現在」との絶対的と言つていい矛盾があつた。弟子たちは、向上しようとする往路にあつて、念佛だけでいい。そのほかに経文も修行も、また、仏像やお寺もいらぬといふ易行を説かれ、帰依した。それなら向上しようとする意志は、どこへ向かえばいいのか。経文の知識を蓄積することも無用だし、善行を積むこともいらない。とすれば、向上しようとする往路をどうすればいいのか？

『惠信尼書簡』に残しているように、親鸞自身でさえ、時に迷うことがあつた。法然は、愚者になつて往生できると言えばよかつた。親鸞にとつては、「惡」（絶対他力）よりもほかに残された方途はないと思われた。これが関東から訪れた弟子たちを前にして、「念佛をとられるのも、念佛を捨ててしまふのも面々のはからいだ」とか、「わたしは地獄が一定、じぶんの住家だ」と思つてゐるという、断崖に面したような言葉を説いた親鸞の真意のようと思える。

世々の順次生で、衆生は誰でも、父母は仏になり兄弟姉妹は子から父母になることができるのは、念佛者になつたときだ。これは絶

対他力を糧にすれば可能だというのは、親鸞が信じてやまないところだつた。念佛、絶対他力だけが、信と不信を同一化できると考えたからだ。

しかし、「現在」に生きるわたしたちのようない信の徒からみると、この親鸞の確信が「永遠」の時に耐えるかどうかわからぬと思える。往路にある衆生と還路にある親鸞の距たりが同一化できないかぎり、信と不信とは同一化されるはずがないと思えるからだ。わたしたち衆生が不信なのは自分が父母になりうるのは自然だが、父母から仏になるためには、信が必要なはずだと思えるからだ。

もちろんそんなことは、親鸞は百も承知だつた。自分を煩惱のきかんな凡夫になぞらえたり、「定聚ノ數ニ入ルコトヲ喜バズ」と告白しているのは、それを知つてゐるからだつたに違ひない。たぶん親鸞は、「絶対他力」という糧によつて、衆生は誰も「自然」の方に向かつて無限に近づくことができると思えた。それが信と不信を同一化することだつたから。親鸞自身もまた、じぶんのなかにある信と不信を同一化しようとしたに違ひない。それが「永遠」に耐える残された道と思えたからだ。もしかすると、こんなことを言うのは、不信者の自己弁解に過ぎないかもしないが、どうしても言つてみたかった。